



〈中国学 わたしの一冊〉 超私的・滬遊雑記

武田, 雅哉

(Citation)

未名, 40・41:33-48

(Issue Date)

2023-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488395>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488395>



〈中国学 わたしの一冊〉

超私的・滬遊雜記

武 田 雅 哉

さてみなさま、これは一九八〇年ころのお話でございます……

わたくしは北海道大学の学部二年の後期になって、なんとはなしに中国文学を専攻に選んだものの、おもしろいと思えるものには巡りあえずにありました。現代文学はクソつまらなそうだし、『三国志』のような「男のロマン」的な世界も虫酸が走ります。そもそも中国なんかまったく興味はなかったのです。とはいえ、高校のころから、短波ラジオで大陸からの、言語としては聞き取れない音を受信して、BGMとして聴いておりました。それは水の底から、水の上を走るボートに乗っている人の会話を聴くようで、ときにそれは、おそらくは韓国のホームドラマであり、中国のやかましい音楽と、狂人の高らかな笑い声でありまして、それらの奇態な音の記憶は、若い脳髓に染みついてしまったのです。その喧騒な音楽が、革命現代京劇のそれであり、狂人の高らかな笑い声とししか聴こえなかったのは、『智取威虎山』で楊子榮が「甘洒熱血写春秋」のひとくさを歌ったあとに放つ「ははははははー！」という笑い声であったということを知りましたのは、それらがVCDで見られるようになってからのことでございます。いずれにしましても、中国に興味があつて聴いていたわけではございません。それはさながら、宇宙からの微弱な電波を拾うことによる地球外知性探査に近いものでありました。

わたくしは、二年生のための基礎ゼミを担当された丸尾常喜先生の研究室を物色し、目ぼしいものを見つけたら、貸していただくのが日常でした。黄色い表紙の汪仲賢『上海俗語図説』（一九三五）の影印本は、何年も借りっぱなしで読みふけていました。また、刊行されたばかりの飯塚朗・中野美代子訳による阿英『晚清小説史』（平凡社東洋文庫、一九七九）を中野先生からちようだいしたことで、見たことも聞いたこともない、しかしながら、そこはかとなく奇妙なタイトルの作品群がおもしろそうだなと感じ——読んでみたら、たいしておもしろくはありませんでした——さらに清末花柳小説の代表であり、呉語小説でもある『海上花列伝』を、中国古典文学大系の太田辰夫先生訳で読んだあと、亜東図書館版の四冊本のうち、一冊めだけは原文で読んでみました。さらに興味は民国時期の鴛鴦蝴蝶派に及び、范煙橋『民国旧派小説史略』（一九六二）の翻訳ノートを作りはじめ、漠然と、卒論はこのあたりかな？ などと生きていたのでございます。

そんなころ、丸尾先生の研究室で、ふと目についた雑誌がありました。青いバックにロケットや人工衛星の軌道に、原子核アイコンをあしらった表紙には、赤で「科学文芸」とあります。どうやら中国の『SFマガジン』的なものらしいのですが、お借りして読んでみたところ、案の定、少しもおもしろくありません。それでも、「中国にSFらしきものがあるー」という発見だけで、わたくしを興奮させるのはじゅうぶんだったのです。これこそは、記念すべき『科学文芸』の創刊号（一九七九年五月）でした（図1）。さっそく、札幌や東京の中国書をあつかう書店で、

著作権保護のため非表示

図1 『科学文芸』1979年創刊号

「科学文芸」や「科学幻想小説」といったキーワードのある新刊書をみつけると、買い求めることにしました。

そうこうするうちに四年になると、中国政府奨学金の留学制度が始まり、しばらく大陸を放浪してもよからうと思いましたが、申請して東京に面接に出かけました。研究テーマは、よく知りもしない「鴛鴦蝴蝶派」にしましたが、腹の奥に秘した真の目的はチベット放浪なのでした。面接の先生から、

「日本の図書館で見られる鴛鴦蝴蝶派の作品は読みましたか？」

とのスルドイ質問が提示され、まったく読んでいなかったわたくしは、パニックにおちいりまして、

「ハイ！ いまや読んでいないものは中国にしかありません。だから私は行かねばならないのです。中国へ！」と、とっさの大法螺を吹くことになった次第なのです。その先生は、

「そうですか」

でその話題は引っこめてくださいましたが、そのあと、ある大御所が無礼な質問をしてきましたので、ほとんど椅子を蹴るように出てきたのでございます。このようなことが功を奏したのでしょうか。一度は落選通知をもらったものの、数日後には補欠で行かせてもらえることになりました。

この留学制度はその後もつづき、北大の後輩たちも、ほぼ全員が中国政府奨学金の留学に陸続と申請したのでしたが、「質問には大法螺で返すべし」という教訓は、ひそかに伝授してきたつもりであります。

留学が決まってから、中国でなすべきこととして、大きく三つの柱を立てておきました。

一、上海と鴛鴦蝴蝶派の研究（いちおう研究テーマにしてみました）

二、中国SFの現状把握

三、チベット潜行

の三つでいいます。

上海に行きたかったのは、『晚清小説史』や『海上花列伝』がかもしれない。上海テイストに染まったためでありましょう。森川久美さんの漫画『蘇州夜曲』『南京路に花吹雪』(図2)が「花とゆめ comics」で完結したのが一九八三年ですから、わたくしがこの一連の作品を読んだのは、留学から帰ったあとということになります。もしも行く前に読んでいたら、「おらは黄子満になる!」とかなんとかほざいて、やっぱり上海に行っていたことでしょう。黄子満とい

のは、これらの作品に登場する、それはそれはカッコいいおあにさんのことでございます。黄子満とい

上海の復旦大学に潜伏することになったわたくしの日課は、昼まで寝て、午後から鳳凰牌の自転車にうち騎って、いまだ清末の地図でなんとか認識できた一九八〇年代初頭の上海市内をあちこち走りまわっては、清末小説に出てくるような建築物や街路を確認して、地図にマーキングをしていくというものであります。上海通社編『上海研究資料』の台湾から出ていた青い表紙の影印本を日本から持ってきていき、そこに書かれてある情報をノートに書きだしては、実地に確認するようなことをしていました。また、清末の上海ガイドブック葛元照(かつげんく)『滬遊雑記』のノートを作り、ここに紹介されたポイントを自転車で探しまわり、現状を調査してメモやスケッチをしておりました。「滬」というのは上海の別名です。そのうち『滬遊雑記』の新訳注本でもつくってやれなどとたくらんでいたのかもしれない。

内山完造に『そんへえ・おおへえ 上海生活三十五年』(岩波書店、一九四九)という本がありますが、上海なら

表示非のため保護権著作

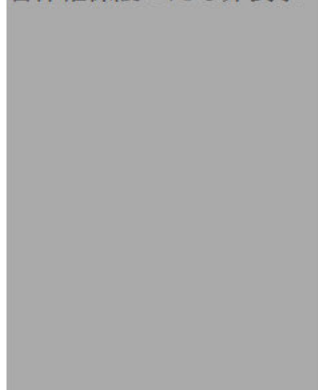


図2 『南京路に花吹雪』

ぬ^{おへえ}下海を、ある工場の敷地内に見つけた時は、それはそれは、うれしゅうございました。昆明路七三号（海門路口）でございます。その工場の門額には「下海浦」と読めぬこともない文字が、かすかに浮き出ておりました。『そんな・おおへえ』には、次のようにあります。

「……そこで上海と云ふから下海があるであらうと思うてをつたら、果して下流（黄浦江の下流）の方、楊樹浦に下海廟と云ふのがあつて、その邊一帯を下海（オオヘエ）と云ふことが解つた」と。

そのとき、どういう交渉をしたのかは忘れましたが、工場の門番のおっちゃんに頼みこんで敷地内に入れてもらい、調べておりますと、午前の仕事を終えた「工人」たちが、ぞろぞろと吐き出されてきました。これから食堂に向かうでしょう。かれらはわたくしに気がつくこと、たちまちまわりに黒山の人だかりを成し、

「おめえ、なにやってるんだ？ なにものだ？」
とたずねるので、

「日本の留学生だが、ここにはむかし下海廟というのがあつたんだよ。上海があるんだから下海だつてあるはずだろ？」

と、向学心旺盛な工人諸君を相手に、『上海研究史料』に書いてあつた情報の受け売りで、講義を始めざるを得なかったでございます。そのあと、工場の食堂に引っぱられて、さんざんおごってもらいましたのは、いうまでもありません。上海の街をうろついているうちに、わたくしは、しばしば港湾の労働者と友だちになって、一緒にメシを食ったりしたのですが、こういうところのメシは、じつにウマイのです。下海廟は、いまでは立派な寺廟に再建されているでございます。

さて、ウマイものといえは、なんと申しまでも、復旦大学学生食堂の東坡肉^{トンポーロウ}であります。キャンパスの一角に

建てられていた留学生楼の一階には、食堂も設けられていましたが、わたくしは、少しばかり歩いて一般の学生食堂に赴き、そこで出される東坡肉をおかずにして、小石まじりの米の飯を腹に詰めこむことを至上の幸福と感じておりました。東坡肉といえは、有名な杭州の楼外楼のものも食べましたが、わたくしの記憶のなかでは、この復旦の東坡肉を超えるものはないのでございます。いまこうして書いておりましたが、よだれが奔流してくるのを禁じ得ません。中国人学生と同じ食堂で食べるのには、当時はまだ糧票リヤンビヤウ（穀物の配給券）が必要でしたが、これは中国人学生の俞志強君が、毎月、じゅうぶんだけ手配してくれました。ある日、午後の街まわりを終えて宿舎にもどりますと、俞君が部屋にやってきて、こう言いました。

「武田、おまえ、きょうの昼に東坡肉を二個も食ったな」
ウーティエン

「ど、どうしてそれを……」

「ふふふ、こつちにはスパイがいて、武田の行動はお見通しなのだ」

当時、留学生宿舎の部屋にはすべて盗聴器が備えられていて、宿舎の地下にはこれを二十四時間体制で聴いて解読している部屋があるなどと、まことしやかに語られていたものです。さらに俞君は、

「ともだちが学生食堂で目撃したのさ」

その後、落語の「酢豆腐」すどうふではありませんが、「東坡肉は一個にかぎりやす」と、みずからの欲望を制することにしたのでしたが、すでに手遅れでして、わたくしは中国人学生から「東坡肉先生」という、ありがたい渾名をちょうだいしたのでございます。

二番めの中国SFについては、毎日のように書店めぐりをしていましたし、日本人留学生にとっては、本はたい

へん安いものだったので、そのころ刊行されたものは、創作と翻訳とを問わず、網羅的に手に入れることができた。まさに三蔵法師のごとき使命感に突き動かされて、中国SFの最新情報を綴っては、『SFマガジン』や『SF宝石』の読者投稿欄に送っていたのですが、珍しい情報だったせいか、送ったものはすべて掲載していただいたようです。ある日、そのような投稿欄に、わたくしのほかにも中国SFについて書いているヤツがいるのに気がつきました。そやつは「結城徹」なる人物であり、わたくしより先に留学も果たしていたらしいのでございます。

復旦大学では、外から講師をまねいて、留学生向けに特別講義をしてもらうことがありました。あるとき、崑曲の講義が設けられたのですが、その講師は、なんと秦瘦鷗しんろう（一九〇八―一九九三）でした。『秋海棠』などの小説

や、慈禧太后おつきの女官である徳齡女史『御香縹緲録』の翻訳などで知られる、いわゆる鴛鴦蝴蝶派の文人とされる御仁でございます。なにしろそのお名前は、『民国旧派小説史略』のなかでしかお目にかかったことがなかったので、「なんと、御存命だったんだー」というのが、すなおな感慨でした。ふたりの女優さんを背後にしたがえて講義を始め、ときどき彼女たちに歌わせる秦瘦鷗先生は、じつにカッコいいおじいちゃんでした（図3）。講義のあとで、そのころ刊行された『秋海棠』（江西人民出版社、一九八〇）をいただき、サインまでちょうだいして、わたくしはホクホク顔でありました。

指導教官の王国安先生は、柳宗元がご専門で、留学生とはよく遊んでくださいました。午前中に設定されていた授業は、ほぼサボっていたわたくしでしたが、



図3 復旦における秦瘦鷗氏の講義

「武田は夜中に勉強してるんだらうから、べつに出なくてもいいさ」

などと言いつつ放つてくださるものですから、ひたすら恐縮しつつ、おことは甘えまくっていたのであります。

「ぼくは宋代以降の文学は、まったく興味が無い。宋代以降は君がやれ」

と、口癖のようにおっしゃっておられました。王先生は、なにか言ったあとに「開頑笑！」と付け加えるのが口ぐせで、ハテ、どこからどこまでが「開頑笑」だったのかなと、しばしば判断に迷うこともございました。

王先生は、こちらの関心を見越して、いろんな人を紹介してくださいました。ある日のこと、

「武田、鄭逸梅^{ていつばい}に会いたくないか？」

とわたしに耳打ちしたあとで、連絡先を書いたメモを渡されました。それは、まごうことなく、民国時期の数々の雑誌の編集を手がけた「補白大王」鄭逸梅（一八九五～一九九二）の住所でした。さっそく手紙を書いてアポを取ったうえで、鄭先生の書齋「紙帳銅瓶室」を訪ねました。包天笑など、著名な民国文人たちの尺牘を見せていただいたのですが、こちらはただただ「へえーッ！」と目を丸くするだけ〔図4〕。

また、わたくしがSFに関心があると知ると、王先生は、上海在住のSF作家である葉永烈氏（一九四〇～二〇二〇）の住所を調べてくださいました。何度かの文通ののち、復旦大学とは反対の徐家匯^{じょかゐ}のほうにあるお宅に何度も通って、手に入りにくいSF関係書の写真を撮らせていただくなど、さんざんお世話になりました〔図5〕。さらに葉先生を通じて、鄭文光（一九二九～二〇〇三）、



図4 鄭逸梅氏と

蕭建亨（一九三〇生）、童恩正（一九三五―一九九七）といった当時の科学文芸作家たちと文通をしたり、お宅にうかがって取材をすることができたのであります。

うかがえば、そのころすでに葉永烈氏は、日本のSF人士と手紙のやりとりをしていて、何人かを紹介してくださいました。そのひとりが、あの「結城徹」だったのです。そこで判明しましたのは、「結城徹」とは世をあざむく仮の名でありまして、本名は野口真己^{しんじ}であることでした。さっそく野口氏との手紙のやりとりが始まったのですが、最初の文通によつて、野口氏が一九八一年当時、なんと神戸大学文学部の三年生であったことがわかりました。最近、本人に確認したところ、松浦恆雄先生の二年後輩であるとうします。かくして野口氏との、中国SFをめぐる頻繁なる文通が始まったのです。こちらが中国のSFの現状を報告すれば、野口氏からは日本の中国SF研究の現状を教えてくださいました。日本ではすでに中国SF研究会なるものが結成されていて、活動を始めていることも知らされ、さっそくわたくしも参加させていただいた次第です。

その後、留学から帰国した際、わたくしは札幌にはすぐにもどらず、数日のあいだ東京に滞在したのですが、野口氏は、わざわざ神戸から東京まで飛んできてくれました。初対面ではありませんが、旧知の友のごとく朝まで愉快地飲んだくれた次第であります。わたくしが東京にいるあいだに、野口氏は、日本古典SF研究の會津信吾氏や、非英語圏SFの紹介に熱心だったSFファンジン『イースカーチュリ』の編集を担当していた波津博明氏、そし

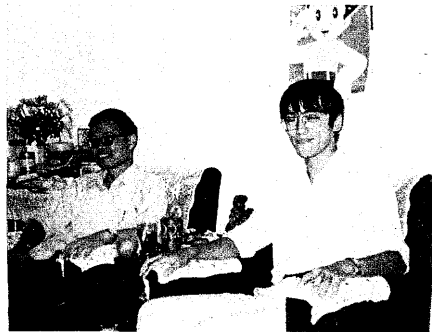


図5 葉永烈氏と

てロシア・ソビエト、東欧SFの研究者にして翻訳家の深見弾氏なども紹介してくださいました。會津氏からは、そのころ調べていた清末のジャーナリスト徐念慈のSF『新法螺先生譚』に関連して、その創作のきっかけとなった岩谷小波さきなみ『法螺先生』（ドイツの『法螺吹き男爵の冒険』の邦訳）の原著コピーを送っていただき、波津氏の勧めで、葉先生の「中国SF小説発展史」の訳注を『イスカーチェリ』に寄稿させていただきます（図6）。深見氏は、中国文学研究者がほぼ無視していた中国SFの動向にいち早く注目し、中国SF研究会の結成を呼びかけた人物でもあります。

「いま、中国語に訳された日本SFのリストを作っているのだが、手伝ってくれないか？」という深見氏の申し出に、

「よろこんで！」

と答えたのは、いうまでもありません。

三番めのテーマであるチベット潜行は、かねてより河口慧海や青木文教の著作を読みふけて、漠然とした憧れをいだいていたことによるのでありますが、特に、戦時中に調査官として潜入し、ラサで終戦を迎えた木村肥佐生の『チベット潜行十年』（毎日新聞社、一九五八。のち中公文庫）は、中国に携えていき、同じルートをたどれないものかと、地図上でシミュレーションをしておりました。当時、外国人によるチベットの自由旅行は、原則として

著作権保護のため非表示

図6 葉永烈「中国SF小説発展史」
訳注（『イスカーチェリ』28）

禁じられていたのですが、わたくしは、留学中に三度の漫遊を満喫させていただきました〔図7〕。それらのチベット潜行については、いくつか雑文にしたこともありますが、今回は触れないでおきましょう。

中国に留学するにあたって、わたくしは『金瓶梅詞話』を縮刷影印した一冊本を日本から携えてきていました。留学していたら、こんな分厚い本も真面目に読むであろうと思ったのかもしれませんが、学生のころに岩波文庫でざっと読んで、拷問のように退屈だったこともあり、けっきょく一字も読まなかったのでございます。そのかわりに、せっかく上海にいるのだからということで、李伯元の撰とされる清末の呉語小説『海天鴻雪記』を、呉方言の話し手の学生に録音してもらい、少しは読んでいたものです。持っていたテキストは、太田辰夫先生が注を付した『呉語研究叢刊2 海天鴻雪記 呉語注稿』（一九七〇）という謄写版刷りの私家版〔図8〕でした。

わたくしの東坡肉事件を暴露した兪志強君は、じつはわたくしより十歳ほど年上で、文革中に大学受験ができなかった世代であります。当時、わたくしどものまわりの中国人学生は、だれもかれも、ほぼ「秀

著作権保護のため非表示

図8 太田辰夫注『呉語研究叢刊2 海天鴻雪記 呉語注稿』（1970）



図7 チベットのラサ。鳥舞台のスケッチ

才」ばかりでした。わたくしは、生意気なことに、愈君とは同年同志のようにつきあっていたのでございます。愈君は湖南の出身で、ネイティヴの上海人ではありませんが、手書きの上海語会話教科書を作り、ぼくに手ほどきをしてくださいました。ところが生徒のほうは、教えた端からものを忘れていくやつでしたので、かれはいつも嘆息を漏らし、

「おれは語学教師には絶対にならないぞ！」

と声高に宣言しておりました。ところが、運命のいたずらというものでしょうか、愈君はその後、呉方言の研究者となつてしまい、アメリカの某大学に奉職した次第でございます。やがてインターネットの時代になつてから、互いの消息が明らかになりました、メールのやりとりをした時には、

「ぼくというダメ学生に上海語を教えた労苦が実を結んだのだろう。ぼくに感謝すべきだな」と伝えておいたのでございます。

さて、はなしは『金瓶梅詞話』にもどります。当時の風潮として、この作品は、たとえば大学の図書館に所蔵されておりましたが、これを閲覧できるのは許可された一部の研究者に限られていたようでございます。そこで、どうしたわけか復旦の学生たちのあいだでは、

「武田のところには『金瓶梅詞話』があるらしいぞ」

という噂がひろまり、まったく面識のない学生たちが、陸続とわが宿舎の門をたた敲き、

「『金瓶梅』を貸してほしい」

とやってきたのでございます。こちらには、まったく読む予定はなかったので、

「よろこんで！」

と貸してあげると、その借りていった学生が、翌日またやってきました。

「まだなにか？」

とたずねると、なんと、徹夜して読みふけり、最後まで読み終えてしまったので、返却しに来たのだということです。
「ひえー、そんなにおもしろいのかよ？」

と、そこでハツとなにかを悟り、改心すれば、少しはおりこうさんになっていたかもしれないのですが、愚昧な性分はなかなか改まらないものであります。まあ、いまでこそ『金瓶梅』は中国で最高におもしろい小説のひとつだと確信するようになりましたものの、ガキの時分には、ほんとうに死ぬほど退屈な小説だったというのが、正直な感想なのでございます。

わたくしは、日本を出ていた中国文学関係の本を何冊か持ってきていましたが、文革を終えてまもない中国の学生たち、それに教員たちは、そんな本の情報に飢えていたようでありました。『金瓶梅詞話』のような読むことのできない古典ばかりでなく、外国の本とそこに書かれた知識や情報を求めて留学生宿舎にやってくる中国人も少なくはありませんでした。ほぼ毎日のように、「おもしろい本はないか？」と、だれかがたずねてきたものです。

そんなある日の、夕食を終えたあとのたそがれどき、またしても、だれかがわたくしの宿舎のドアをノックしました。

「どうぞ」

と言うと、入ってきましたのは中国人ではありません。紺色の中山服をまとった日本人留学生でした。

当時の留学生は、中国の地に降りるなり、男も女も、まずは紺色や緑色の中山服、もしくは人民服と呼ばれるものを購入して着ていました。なによりも、街のなかでも目立たないように、中国人のなかに溶けこんで行動するた

めには、これを自然に着こなすことが必須であつたのです。わたくしも、特に外出するときには、紺色の上下を着て行動していたものであります。

留学生は中国語で名前を呼び合っていましたが入ってきたかれは、「ウーヂー」と呼ばれていました。その「ウーヂー」は、復旦の中国人学生のあいだで、えらく人望があつたようです。要するに、男女を問わず、モテていたのであります。

そのころ中国で人気を博していたわが国のアーティストのひとり、さだまさし（佐田雅志）でした。ちょうどわたくしどもが留学していたころ、上海でコンサートを催したのですが、日本人留学生も招待され、最前列の席にあてがわれたものです。中国人の学生たちのあいだでは「雅志^{ヤヂ}」といえは知らぬものとてなかつたのですが、わたくしの姓名などは、二文字まで同じなものですから、しばしば「武田^{ウーティエン}雅志^{ヤヂ}」と誤って呼ばれ、いささかムツとしていたものであります。甚だしきにいたつては、わたくしの名を完全に「佐田^{ソウティエン}雅志^{ヤヂ}」と、50%の正答率でこと足れりとするガサツこのうえないやからもおりまして、ひそかに悲憤慷慨したこともございます。

いずれにしても、その人気アーティストのおかげをもつて、中国人学生の脳内では、「ウーヂー」は「ヤーヂー」と対を成し、そのほかあれやこれやの「某ヂー」は、覚えやすい日本男児の名前として認識されていたのであります。そして、この「ウーヂー」と呼ばれた人物こそは、当時の京都大学博士課程院生、釜谷^{アハヤ}武志氏なのでございます。

そのころのわたくしは、釜谷さんとは、それほど親しく交流していたわけではありません。こちらは他人^{ひと}さまの金でしばらく遊ばせてもらいましょと流れてきたようなヤクザな学部生、むこうはちゃんと研究をしに来ていらっしゃる立派な博士課程のおにいさまということで、距離を置いていたのかもしれませんが。その釜谷さんが、いつ

たいなんの用でしよう？

武志^{ウーヂー}は開口一番、こう言いました。

「武田君、魯迅の本もつてる？」

「え？ 魯迅ですか？」

「うん。『且介亭雜文』^{そかいてい}とかないかな？ ちよつと読みたくなって」

「ここにはありませんねえ」

「そう。じゃあまた」

と、これでその場のやりとりは、あっさり終わってしまったのでした。

「君子の交わり」というには、あまりに淡すぎる交わりでしかなかったにもかかわらず、帰国してからも、君子にほかならない釜谷さんとは、なんとなく通信を交わしていました。そして、二〇〇七年の七月には、神戸大学での集中講義にお呼びいただき、再会を果たしたというわけなのでございます。

そのような次第で、『且介亭雜文』という書名は、わたくしの脳内では、著者であるはずの魯迅をさしおいて、どうしても「武志」^{ウーヂー}にいさんこと釜谷さんの笑顔を記憶のむこうから呼びだしてしまうのであります。いまでも、この本をひもとくたびに、あの夕食後の訪問者の一件を思いだして、ニヤリとしてしまうのでした。これまた「わたしの一冊」に含まれるといえるでしょうか？

といったところで、筆を擱くとしましょう。「わたしの一冊」が多すぎました。なにとぞご容赦を！

付記

札幌にビールを飲みいらした濱田麻矢先生から、『未名』の「わたしの一冊」に、なにか書くべし。については「わたしの一冊」という趣旨は無視してよい」との、身にあまるお申し出をちようだいしたもの、『未名』になにかを書く資格は、ぼくにはないのでは？ と、三分ほど苦悩しました。そこでふと思ひ出し、四十年以上も前から神戸大とは宿縁のようなものがあるんだよなあ、などつぶやいたところ、濱田先生から「それ、書いて！」というわけで、このあたりを肴に、上海での留学生活について書いてみることにしました。文字どおり前世紀の遺物でありますので、なにとぞ眉に唾をつけながらお読みください。

釜谷先生と濱田先生には、二〇〇七年に神大での集中講義にお呼びいただき、好奇心あふれる受講生の皆さんに囲まれて、講師として至福の時間を過ごさせていただきました。また二〇一四年九月には、濱田先生に北大での集中講義をお願いしました。そしていま、北大中文研究室の相棒は、かつて神大生数名で徒党を組んで「北伐」を敢行し、拙宅を襲撃した田村容子さんにほかなりません。神戸大学の中文のみなさん、これからも北海道大学の中文と末永くおつきあいいただければ幸いです。

八月十五日 吳月娘の誕生日に 札幌にて

(ただだまさや・北海道大学名誉教授)